

橋本 裕介

ロームシアター京都 プログラム・ディレクター/KYOTO EXPERIMENT プログラム・ディレクター

トヨタ コレオグラフィーアワード2014・選評

トヨタコレオグラフィーアワード 2012年に続き、2度目の審査員を務めた。審査員は、約200件の書類と映像の資料から6組のファイナリストを選出し、最終選考会「ネクステージ」で実際の上演をゲスト審査員と共に審査する。

こうしたプロセスのため、ある種の期待を込めた上演の姿との比較の中で実際の上演を観ることになったことを、選評に先立ってお伝えしておく。

ファイナリスト選考会でもネクステージでも、私が着目した点は以下のようなものになる。次代を担う振付家の発掘と育成というこのアワードの趣旨を踏まえ、「他のアーティストや異ジャンルのアートへの啓発性があるか」「作品が創られた文脈を解さない観客に対して開かれているか」という2点である。つまり私の個人的な関心、面白いと思うかどうかは（人間なので除外は出来ないが）出来るだけ優先順位を下げた観るように務めた。また、論理的に説明がつかないが、人々がつい応援したくなる存在というのもいて、それをカリスマと呼ぶが、人材発掘が趣旨なのでそうした想いも無視出来ないものの、やはりそれが狭いコミュニティの中だけで通用するのかどうかということは大事だと考える。

さて、私が注目したファイナリストについて、選評を述べたいと思う。

木村玲奈は、ファイナリスト選考会から強く推していた振付家である。今回上演された作品『どこかで生まれて、どこかで暮らす。』では、この作品で使用される動きがどのように生成されるのかが作品の内に明示されており、まずその点が観客へ表現を手渡す手続きとして真っ当であると感じた。舞台上に立ち現れている表現の主題だけでなく、なぜ、どのように動くのかというプロセスを観客と共有してこそ、ダンスにおいてはその作品の核心に迫れるはずだと考えるからだ。私がこの作品をどのように理解したのかと言えば、「不在」を取り扱うことで観客側の身体感覚の拡張を試みているように受け取った。冒頭電話の声から作品は始まるが、電話の声とは距離を喪失した声、つまり「身体のない声」である。そこに措かれた身体たちは、直接的に声と関わら／れないために情景を引き受けるものではない。そこから立ち上がってくる動きの連鎖は、決して図式的ではない構図を描き、頭の中に確かな身体感覚のイメージを浮かび上がらせた。刺激的なムーブメントや演出がなされていないことを不満に思う向きもあっただろ

うが、今回それを支持するならば contact Gonzo が唯一の存在だったが、そもそもダンス作品へのアプローチが全く異なるので、刺激の観点だけで比較するわけにはいかないだろう。

次に contact Gonzo であるが、『訓練されていない素人のための振付コンセプト 001/重さと動きについての習作』として、物質としての身体（なぜなら訓練というプロセスを通じて意志されていないから）がなぜ、どのように動くのかというダンスの前提に関わる問いをそのままに作品化していた。作品のストラクチャーは明快で仕様書が準備されており、そこにはタイミングが厳密に指示され、使用されるガジェットたちによって奏でられるバリエーションは、さながら音楽である。ダンスの外側からやって来て、ダンスの分野における共通理解を、異なるアートのジャンルで用いられてきた手法で脱構築するやり方は悠然としており、（実際に観客の大きな笑いを誘っていたように）ある意味安心して観ることができた。彼らが始めた肉体を衝突させるパフォーマンスは、ダンス分野へもパフォーマンス・アートとしての美術分野へも啓発性を持っていたが、今回の取り組みは「ダンス」という枠組みの中に、異ジャンルから諸要素をはめ込んでいくプロセスに思えたことが残念である。それが安心して観ることが出来た理由でもある。

川村美紀子『インナーマミー』だが、タイトルや作品コンセプトのテキストと、舞台上で演じられていることをつなげて観ることが出来なかったことが、私が評価する上で難しかった第一の点である。ムーブメントへの探求とダンサー自身の鍛錬によって可能になった表現であろうことは評価に値し、まとまった作品としての強度はあった。とは言え、演出上のある種のテイストや使用音源といった意匠が現代的であるだけで、それをもって作家の視点で現在を切り取った表現であると理解は出来なかった。コンセプトのテキストをもし正確に理解出来ていたら違ったのかもしれないが、動くことそのものへの疑いを持たず、現状を肯定したところから始まっているのだとすれば、表現の根拠として強いものとは感じられない。作品をまとめる力は振付家の仕事のひとつだが、作家としての振付家の仕事から言えば優先順位は高くない。経験である程度身に付くものだからだ。

振子びじん『no title』は、設定としては了解できたものの、特に発せられる言葉との対応関係に立ち上がってくる何かを期待したが得られなかったことが残念だった。検討違いかもしれないが、その対応関係から浮かび上がってくるもので表現の時間が構成されるのではないかと考えたからだ。また、私は彼の身体へのまなざしに着目してこれまで数度作品を観て来たが、その上で今回の上演は物足りなかった。言っても意味のない話したが、実は『空気と屁』という作品が選考会で上演されるのではないかと期待していた。多くのダンス作品がある種の「可能

性」を表現しようとして、人間とその身体に対して肯定形の作品をつくるのに対し、彼は「不可能性」にアプローチしようとしているからだ。その点『空気と屁』は顕著にそのアプローチが現れており、人間そのものへの悪意すら感じた。

以上が今回のアワードで私が考えたことである。コメントを述べられなかったアーティストには申し訳ないが、作品評というより、私自身が今後もダンスに関わって仕事をする上で考えるべき論点を、それを持った上演作品を援用して述べさせてもらったとご理解頂きたい。